



市民海外派遣研修生の皆さん (スコーミッシュ邸)



ホストファミリーと関谷さん



関谷 さん

今年の十月、市民海外研修に参加し、カナダ・バンクーバーへ七日八日で行ってきました。研修目的は、カナダの生活文化と商業集積地の視察です。この研修で一番印象に残ったのは、バンクーバー市内の四日間のホームステイ体験です。参加者八名が二名ずつ四組に分かれてのステイ。私たちのステイ先は、三十歳代前半の夫婦、男の子二人(二歳と一歳)の若いファミリーでした。参加が決まってから、四日間のホームステイのこと、心のどこかで重荷になっていました。見ず知らずの異国の人の家に泊めてもらう不安、言葉、生活習慣の違い等々。

二日目、老人ホームなどの視察を終えて、ステイ先へ向うバスの中では、みんなが緊張しているのが感じられました。頭の中で挨拶と自己紹介の言葉を英語で反芻しながら。到着するとファミリーは、夫婦で玄関で迎えてくれました。ハロー！ナ

ホームステイも二三日目になると、子どもたちとも慣れて、言葉の壁があっても、気持ちを通い合えることを感じ、嬉しく思いました。そして、異国、言葉、生活習慣の違いがあっても、気持ちは通い合えるものだと思います。不思議なもので、

今回の研修からホームステイが取り入れられ、カナダの家庭生活を体験することができた。夫婦、親子のあり方を少しだけ覗いたように思う。子どもは十八歳になると自立し、家を出ると言う。親は子どもが学校へ行っている時以外ほとんど目を離さない。十八年間で親子の信頼関係がしっかりと確立され、自立しているんだなと感じられた。この国では夫婦が子どもを車の中に残して、などということは考えられないだろう。

研修最後に訪れたのは、スコーミッシュ。「風の母」とも呼ばれる偉大な自然を満喫できた。自然とロマン、古代文化と近代文化、いろいろなものが混じり合い何と魅力的な国だろう。訪れる人々に感動を与え、またきつと来たい、こんな気持ちにさせるカナダ。言葉の違いはあれ違和感なく溶け込むことができた。出会った方々の優しさや暖かさ、大きさを心に秘めながら、私の日本、私の新津をもっと愛していききたい。

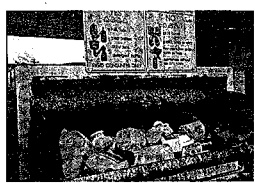
自然とロマン、古代文化と近代文化、いろいろなものが混じり合い何と魅力的な国だろう。訪れる人々に感動を与え、またきつと来たい、こんな気持ちにさせるカナダ。言葉の違いはあれ違和感なく溶け込むことができた。出会った方々の優しさや暖かさ、大きさを心に秘めながら、私の日本、私の新津をもっと愛していききたい。

心の中で負担になっていたホームステイが、いつの間にか負担でなくなり、むしろもつと長くステイしても、もつというくらいなことを話したい、聞いてみたい、体験してみたい気持ちに変わっていました。今回のステイ体験は、ホテル泊の旅行にとかくありがたみ、ベルトコンペアに乗って日程を消化するスタイルと違って、自分で観る、話す、聞く、調べるといふ素晴らしい体験をさせてもらったと思います。

日本の約二十七倍の雄大な国土と自然の中に約三千万人の人々が住み、先住のインディアンとイヌイットのほか、英独仏伊、アジア系多様な民族で構成され、公用語も英語と仏語が用いられ、また、雄大な自然を生かしたまちづくりが行われており、市内だけで百五十を数える公園があり、緑地とビルと海を計画的に調和させた街並みは、日本の都市では見られない自然としたものでした。日本の日常が普通のことと錯覚していたことに外国へ行って気がつく、これからはもっと違う視点から物事をながめることが必要なのだと思います。



バンクーバーの街並み



リサイクルセンターの分別コンテナ



老人福祉施設の入居者と



ホストファミリーと阿部さん



メリーヒル小学校の教室

カナダの生活文化を訪ねて

市民海外派遣研修報告...①

今年の研修地はカナダ。「カナダの生活文化と商業集積地」をテーマに実施され、公募の市民8名が参加しました。10月1日から8日まで8日間の日程で、バンクーバーで小学校や福祉施設などを視察し、一般家庭に4泊ホームステイしたほか、スコーミッシュの農場にファームステイしました。

今号から数回にわたり、参加者のレポートをご紹介します。

します。平成3年度から始まった市民海外派遣研修も今年で7回を数え、61名の市民が海外を訪問。研修後も「市民海外派遣研修生の集い」を開催するなど、研修生同士の交流を深めています。また、海外派遣の体験を地域やまちづくりに生かしていこうと、研修生たちの自主的な活動も続いています。



阿部 さん

期待と不安を胸に抱き降り立った、カナダ・バンクーバー空港、時折小雨の降る中、タクシーに揺られながら車窓よりの風景に見入る。まず目に飛びこんで来たのは、カナダ国旗、ブリティッシュコロンビア州旗、それと深い緑の木々。バンクーバーを紹介する文章の中にこんな一節があった。「どこにいても緑が視界の中にある都市、自然を大切にしながら育てた文化を体いっぱい感じたい。本当に空気に少し触れただけでそんな気持ちになつてきた。」

今、各国で問題視されている老人福祉、もちろん日本でも新津でも例外ではない。私たちが最初に訪れたのは、リンパレロッジ老人福祉施設。何らかの症状の出た人たちは長期ケアを想定し、本人と家族で地域のソーシャルワーカーに相談し、病院に入るか、人の力でのケアをするかを選ぶ。「人の力」を選んで人がこの施設に入ってくる。次はリサイクルセンター。このセンターでは年間三十万のゴミが集められ、そのうち二〇〇がリサイクル処理をされており、二〇〇一年には五〇が引き上げるといふ。訪れた先々で学び、考えさせられた自分のできることから実践して

またきつと来たい！

阿部由美子 (福島)

いかなければと思

